



昔語質
 庫卷之
 初篇



昔語質屋庫卷之二

東都

曲亭馬琴演

第三

曾我十郎衝乃小袖



忘れ^{こぼ}羊^とを^へ経^へり^のを^を友^{とも}切^き丸^{まる}の^を言^{こと}釋^まを^をま^まく^くお^おひ^ひめ^めを^をあ^あら^らわ^わき^き。
 抑^{おさ}是^しの^を曾^そ我^が十^じ郎^ら祐^{すけ}成^{なり}小^こ二^に世^よと^と契^{ちぎ}り^の大^{おほ}磯^{いそ}の^を虎^{とら}が^を夫^{をと}の^を像^{やま}見^みと^と持^た。
 佛^{ぶつ}堂^{どう}の^を柱^{はしら}に^に掛^かけ^てお^おも^もた^たる^る小^こ意^いら^らど^ど回^{まわ}り^のあ^あら^らじ^じ今^{いま}様^{さま}小^こ袖^{そで}八^{はち}丈^{ぢょう}絹^{ぬい}の^を
 縹^{あざ}緋^ひ紋^{もん}の^を葺^ふき^の帽^{ぼう}額^{がく}の^を外^{ほか}小^こ摸^も様^{さま}を^をあ^あら^らわ^わす^す小^こ信^{のぶ}と^とた^た證^{しん}据^こあ^あら^らじ^じ
 了^しせ^せが^が規^みる^るの^を疑^{うたが}ひ^ひと^とり^りや^やと^とあ^ある^る人^{ひと}千^ち鳥^とを^を縫^{ぬい}ぢ^ぢと^とり^り十^じ郎^らぬ^ぬの^を
 衣^い裳^さと^とい^いつ^つご^ごう^うあ^あら^らじ^じ千^ち鳥^とを^をつ^つけ^け五^ご郎^らど^どの^を衣^い裳^さと^とい^いつ^つご^ごう^うの^を蝶^{てつ}を^を
 け^けく^くる^るや^やあ^あら^らじ^じの^をゆ^ゆい^いと^とれ^れど^ども^も竹^{たけ}の^をゆ^ゆき^き小^こ蝶^{てつ}と^と衝^つを^をつ^つく^くる^るこ^この^を
 ら^らど^どと^とれ^れて^てそ^そ當^{あた}初^{はつ}曾^そ我^が兄^{あに}弟^{てい}が^が被^また^たれ^れば^ばと^とあ^あの^を違^{ちが}へ^へる^る蛇^{へび}小^こ足^{あし}を^を添^そふ^ふ。

早稲田大学文学部

人研究 雲英末雄

54-00067

大磯の席蓆成り付死
せしむるまでと縁まらぬ



あつて虚実の只るもの。取捨よあらん。さるを物領よ。とひ捨
 たる人の動されがひの控女を今の控君小引うて。仇を討んとく
 寃ふ壮士が。色を好て花街に通。志も獨あん。さるむさふの彼祐
 経の母も變れ。と只目前の理を推。その才の短。へあめく。本存小あ。と。
 仇人の所在。され。さるを索。ひめ。れる。控。さる。む。さ。る。と。絶。て。え。る。べ。く。
 され。仇人の威勢。ある。借神。よ。さ。る。も。眼。前。よ。あ。り。これ。が。を。放。さ。せん
 女流。あ。れ。も。人。を。さ。る。の。才。あ。れ。が。と。あ。り。席。も。あ。る。隨。小。祐。成。を。あ。ひ
 どの。つ。と。い。ふ。も。祐。成。と。れ。が。あ。る。志。を。揚。さ。ん。仇。討。小。と。し。物。の。日。ま。も。身。の
 大。の。を。告。げ。れ。が。今。あ。り。と。い。ひ。と。れ。後。の。恨。も。痛。し。れ。ば。途。す。り。後。て。後
 者。と。め。し。く。虎。へ。像。見。を。か。り。し。と。又。一。談。小。大。蔵。の。虎。の。相。模。圖。諸。越。

の里。さ。る。生。れ。る。より。と。乳。名。を。於。鬼。と。唱。へ。後。は。虎。と。改。名。と。い。ふ。と。
 縁。故。を。解。と。れ。於。鬼。の。異。朝。楚。國。の。方。と。さ。る。と。虎。の。と。又。諸。越。の。里。
 諸。越。の。原。若。の。相。模。の。名。所。と。し。和。歌。よ。し。の。諸。越。を。唐。山。と。い。ひ。て。諸。
 也。と。さ。る。と。れ。が。人。唐。家。集。よ。と。あ。が。ま。終。の。り。ろ。の。里。と。さ。る。と。
 つ。ま。ね。を。や。め。ら。の。と。ろ。も。と。い。ひ。らん。や。の。と。ろ。え。え。と。れ。と。あ。る。と。れ。の。好。
 の。り。の。虎。と。い。ひ。名。小。隋。會。と。し。乳。名。を。於。鬼。と。し。諸。越。の。里。の。り。と。い。ひ。
 と。ろ。と。い。ひ。と。れ。の。あ。り。ん。提。る。物。と。記。り。を。え。め。ら。と。と。と。彼。曾。我。兄。才。
 南。家。の。祖。大。臣。孫。原。朝。臣。武。智。實。の。四。男。參。後。之。位。と。唐。家。の。
 後。流。小。作。と。し。唐。家。より。十一。代。の。孫。伊。豆。國。押。領。使。維。職。の。子。耕。野。
 九。郎。維。次。の。子。俊。野。四。郎。以。夫。と。家。次。の。子。後。五。位。下。太。郎。大。夫。祐。家。實。
 八。又。津。見。八。道。寂。蓮。が。子。あり。祐。家。が。子。竹。津。二。郎。祐。近。の。子。あり。と。い。ふ。

賢相と称せらるる。諸葛武侯の送物なれども。世に伯樂あらざれば。馬骨のみ。一匹馬の皮張るて。鳴らざるの由あり。されば中葉周唐の御供。一匹の世も安く。冬は煖。夏は涼。雪のゆへも。氷のゆへも。悉古器と目利されども。世の重宝とあり。ゆへに。賢車の穴。犀犀と。莊子が所謂。散木を。羨むるものゆへなり。とて。疋鼓の原軍器なれども。北狄の樂。ゆへに。これを。用るは。小。後中國。小。はり。ま。ず。今。ある。べ。の。樂。器。と。なり。ぬ。ゆ。へ。に。疋。鼓。の。殺。伐。の。声。あり。され。を。樂。器。と。あ。ら。じ。し。と。あ。く。小。世。の。中。新。あり。と。漢。の。博。士。の。吟。た。ぬ。され。ば。さ。も。上。古。の。僧。ある。疋。鼓。を。鳴。と。を。禁。め。ら。れ。た。る。例。も。あれ。と。今。小。至。と。て。是。非。を。論。じ。べ。う。も。あ。ら。ぬ。其。ゆ。へ。諸。葛。武。侯。小。後。ひ。と。へ。の。ら。る。も。些。を。ら。る。の。辨。た。る。各。位。の。り。ふ。あ。り。ひ。あ。り。彼。劉。玄。徳。之。漢。景。帝。の。玄。孫。も。く。中。山。靖。王。の。後。あり。後。漢。の。獻。帝。既。し。曹。丕。小。殺。され。ぬ。ひ。く。漢。の。祚。の。絶。ん。と。を。悲。む。衆。小。推。そ。れ。と。己。と。を。比。じ。天子。の。位。小。即。め。ひ。在。位。僅。く。二。年。あり。白。帝。城。ゆ。へ。崩。と。あ。ひ。り。と。謚。し。と。昭。烈。皇。帝。と。す。る。太子。劉。禪。少。く。位。を。嗣。め。ひ。が。あ。ら。る。賢。う。べ。を。い。て。一。ふ。佞。臣。黃。皓。ホ。を。寵。愛。し。と。遂。に。亡。び。ぬ。ひ。り。と。あ。ら。れ。ど。漢。の。正。統。も。く。な。ら。る。な。れ。ば。後。帝。も。又。帝。禪。と。も。稱。と。ぎ。ま。を。後。の。掌。者。の。只。舊。而。文。あ。ら。ひ。て。改。め。ん。昭。烈。を。先。主。と。し。帝。禪。を。後。主。と。す。と。ま。く。と。し。唯。綱。目。の。一。書。に。至。り。と。う。く。の。理。を。辨。て。漢。の。獻。帝。の。末。に。附。く。後。漢。昭。烈。皇。帝。章。武。二。年。と。あり。小。亦。見。し。と。る。帝。禪。を。後。主。と。書。し。れ。ば。後。の。難。を。脱。し。と。り。ぬ。の。ち。え。小。至。と。く。ひ。と。り。會。稽。の。楊。維。禎。が。正。統。の。辨。め。昭。烈。を。尊。む。と。と。理。也。

楊氏か
正統辨
輟冊録
卷四
又

分明あり。より。明の學士ホ昭烈帝禪を天子の正統と定めたる。
 羅貫本が之國志演義ありは改りて蜀の先主後主の字
 一に之夫主との君よ次の稱をも周礼よ主との公々大夫をのりたり。
 又礼記礼運よ公よ仕を臣とひひ。公よ仕を僕とひひとあり。
 此の臣との君よ對するの稱も。僕との主よ對するの稱も。これより。
 日本の中葉より主後の稱あり。此より主後との主人僕後の略も
 天子よあつて主後と稱とべの謂あり。ゆれば玄徳在成都天子の
 位よ即あひてこれを昭烈と謚。惠陵のみさされ。葬もされ。初
 賤絀とあり。帝禪ハ魏よ降とあり。安樂公よ封じられ。地を失ふの君。
 成敗よ誌とあり。帝と稱するの義あり。とあり。のものとあり。魏ハ漢
 の賊あり。後世より彼が封爵を賜ふ。帝禪を安樂公とよぶ。亦
 彼曹丕が献帝を推あり。て山陽公よ封じ。よあり。トよぶ。謚あり。
 余よ帝禪と稱するなり。これを後主とのの義あり。とあり。稱り。
 んが晋の陳壽が之國志を撰む。先主後主の名を創た。
 常璩が蜀志あり。よあり。とあり。の陳壽が之國志ハ
 鍾會が蜀將を會する。禱よ昭烈帝を敗して。益別の先主とある
 之を。小先主の名なり。晋の魏を篡ひ。吳を亡
 して之國を并。てあり。天よ西の日あり。地よ西の皇あり。
 番よあり。何れも。今千載の後あり。の稱よ。
 漢とて。又漢を改め。蜀とす。陳壽が。
 が日抄とあり。蜀の地の名あり。國の名あり。昭烈帝ハ
 漢とて。稱あり。蜀と稱あり。孫權とあり。魏

仁賢堂書卷二

賊を討んと盟ひあひしとんも漢とてを稱あひしとれられを蜀との
 めの魏人の所たて彼昭烈皇帝の漢を嗣あひを憎む故より争
 劉氏朝漢の正統を絶まく争ひ漢とのことと忘て蜀とへ名つけしを
 あり小後の文人墨客の陳壽が當時より阿枉なるを曉らざ杜子
 美が詩といふも蜀主と稱しをゆつて義は仗理を知るの学
 者といふべくん明小至アアアアの理を曉るといふも蜀
 漢と唱りあり前漢後漢小紛まんとて厭つ漢末とも季
 漢とも稱すとづらよそれを蜀漢と稱するといふく謂ふこと卒歩
 せり百歩を笑ふの惑ひあり今の君も曹氏魏司馬氏晋の臣小
 あらど況く日本人のあらざあふをほ魏と晋と阿魏く漢を
 賤く蜀と名けしを先主後主と稱する抑誰があらざ理義のあふ
 書を誦むりめいれらるるゆえとてやされ彼綱目小帝禪を後主と
 るを姚燧といふ博士いひて非をたれ又諸葛孔明の書翰も
 先主と稱するあり原本あり先帝とありを晋は傳るる先主
 と改めたる杜微が傳る孔明の書を戒て帝禪の事をささるる
 更に朝廷の主公今年始十八とあり朝廷と稱するから主公といひん
 道理あり後人の加筆せし疑ふべし以上顧武が説くとて二國志を
 ありたり陳壽の字を美祚といひて巴西安漢といふところの人あり
 少ありしとれ譙周を師とて漢蜀小仕一觀閣令史といふ職を授
 らる父の喪小疾ありて婢小を九せうたりりれ郷黨の幾をうり
 これ小せでられ累年零落あられども晋張華その才を愛して
 孝廉小舉しとを佐使者作郎よりうりふられんが二國志を撰ま

書を誦むりめいれらるるゆえとてやされ彼綱目小帝禪を後主と
 るを姚燧といふ博士いひて非をたれ又諸葛孔明の書翰も
 先主と稱するあり原本あり先帝とありを晋は傳るる先主
 と改めたる杜微が傳る孔明の書を戒て帝禪の事をささるる
 更に朝廷の主公今年始十八とあり朝廷と稱するから主公といひん
 道理あり後人の加筆せし疑ふべし以上顧武が説くとて二國志を
 ありたり陳壽の字を美祚といひて巴西安漢といふところの人あり
 少ありしとれ譙周を師とて漢蜀小仕一觀閣令史といふ職を授
 らる父の喪小疾ありて婢小を九せうたりりれ郷黨の幾をうり
 これ小せでられ累年零落あられども晋張華その才を愛して
 孝廉小舉しとを佐使者作郎よりうりふられんが二國志を撰ま

實錄卷二

十三

大神宮大神樂獅舞圖說

今の獅子舞。漢の諸葛孔明
 ようしてやる。孔明南蛮の
 孟獲を攻めし。獅子を獲。後の
 中人をして進退自在。術を極む。獅
 どもが馳せて。この陣へ追中へ
 猛獸を。退けし。獅子
 小園と。は。大神樂獅子
 舞の。優る。り。
 昔。物語。云。む。寛永。大神宮
 御被。大神樂。と。毎日。江中。俳
 細。と。鼻。高。假。面。と。ふ
 下。の。直。垂。と。被。て。白。袴。と。穿。
 脚。幣。と。持。て。先。へ。ま。る。り。の。次。小
 十四。五。歳。と。り。の。男。童。瑤。路。と
 穿。中。啓。の。扇。と。鈴。と。と。左。右。小
 の。ら。て。の。あ。む。三。番。小。麻。上。下
 多。く。男。箱。と。持。四。か。ん。よ。布
 衣。の。表。末。と。り。の。男。の。次。四。足
 附。る。大。長。柄。の。蓋。と。取。て。の。内
 の。け。て。お。た。の。上。へ。獅子。の。次。と
 居。中。小。大。鼓。と。お。一。万。度。の。御。被
 と。中。よ。並。て。御。幣。と。立。け。長。柄
 叉。と。お。人。と。か。つ。め。の。皆。烏
 帽子。と。被。て。白。張。袴。と。穿。左。右
 つ。を。小。笛。小。鼓。打。小。大。鼓。打。拍。子
 う。ら。の。せ。と。り。の。瑤。路。い。て。お
 男。童。神。子。と。舞。ふ。拍。子
 舞。小。意。と。り。て。感。ふ。は。る。る。



按。この。小。ま。は。大神。樂。の。俳。優。の。か。つ。め。と。り
 たる。伊。勢。山。田。の。獅子。次。の。神。子。と。摸。り。と
 度。鬼。と。り。の。小。ま。と。り。の。小。ま。と。り。の。小。ま。

ありきりら陳壽が父の漢の馬謖せまとりの参軍たりし行
 の馬謖罪有るれば諸葛武侯もつら馬謖を誅すその罪
 糺し又陳壽が父の頭髮を剪て僅小命を助す孔明が
 子の諸葛瞻の常は陳壽を殺すべからんらのみを恨て
 漢をばいりて賤しす。漢まげ小書あり。又孔明が傳を傳して諸
 葛亮の連年象を動しつら。象をとりも切る。この武畧ありの
 小あふくと織りす。晋書又世説新語補あれば之國志の拓忌依佐
 の筆ふ成るりのあれどその文をのみ愛しす。理をを曉らざるも
 の多かり。縦通俗之國志とも誦んりの正統國連僭國の別あ
 るをあるべし。正統との昭烈帝のよれ。漢の帝親みす。後たるを
 継ぐ魏賊を討め人をいり國運との司馬氏の魏小代りて天下
 を有るり。これを正統とのさうすの漢の統を篡たるのあらねど
 その奸悪の曹操又子小芳らとされ天を有ふ及て世上一由も
 妻ららうれ故よりこれを國運との又僭國との曹操が奸雄ゆ漢室
 を倒し。曹丞に至りて献帝を迫ひ失ひ天子の位を篡とのへとも全
 四海と有るべ故よりこれを僭國との殷の夏小代りて立周の殷小
 うりり立漢の秦楚を討滅し立光武の王莽を誅して立昭
 烈の曹操を討す。西川は帝たるをた。る正統の天子とさるはべ
 し。あふんが魏の漢の賊あり。晋の魏の悪も代りりの。其の論する
 小るるべ。以上金聖歎大日本神代より百万載の今に至りて革命
 の時あり。萬國の中又有るもいと貴大御國あれば此の國より
 比へば。頼朝卿武家の棟梁とて。六十餘國の總追補使とあり

成敗はちうひる。理をふらうと苗ひの稀。後鳥羽院のうか
 りて北條義時を滅して世をひのぶる御をよと思食たりあひよ
 けれど後ひよの武士の身やうぬ北條が武運のまじふ盡どひが
 ひあいうら負あひる。二皇あひる。遠く嶋へつげられあひるれば美
 久記を讀みの只顧後鳥羽院のうらあれとあひるのどあうとあひるの
 久時より八世の孫高時入道が時小至して後醍醐院満より後
 鳥羽院のあし志をほげせあひ高時を誅滅して。むうの世よあひる
 してそのあひるひ起してあひる移り一旦沈落ちあひる北條が武運
 ら小盡なればつ移る。御本意を遂あひる。是後鳥羽院の殿を
 短く。後醍醐院の謀畧長とせあひるあひる成敗敗るの時運
 ぶあひるのあひるは太平記を讀みのあひる帝の思ふたりあひる
 り。後鳥羽院を不まらば又後醍醐院をも不まらばあひる
 ら北條の意をとめ後まの官軍へ意をとらあひるその成敗よの眼う
 けりて理あひる不まらばあひる軍記小後鳥羽院の義時を亡
 さんとあひるるあひるあひる。龜菊が諺詠よ起れりあひる。こ
 り義時をとまらばあひる。この君年来武を好せあひる。以ん奉動を推
 量るよのあひるあひる。食たりあひるあひる。實朝公をい謂
 位討よあひるんとて又祖あひるあひる。右大臣よりあひる。亦彼え人の
 議論よあひる。南朝のうらあひる。後醍醐院を中義貞朝臣
 を征夷大將軍あひる。足利殿を討あひる。忽比台岳の衛を失ひる。
 親王の北越の雪と争あひる。やあ貞陣没あひる。あひる。あひる新田
 殿の子孫を大將軍と。楠公の子孫を副將軍とあひる。その武威

北條義時

七

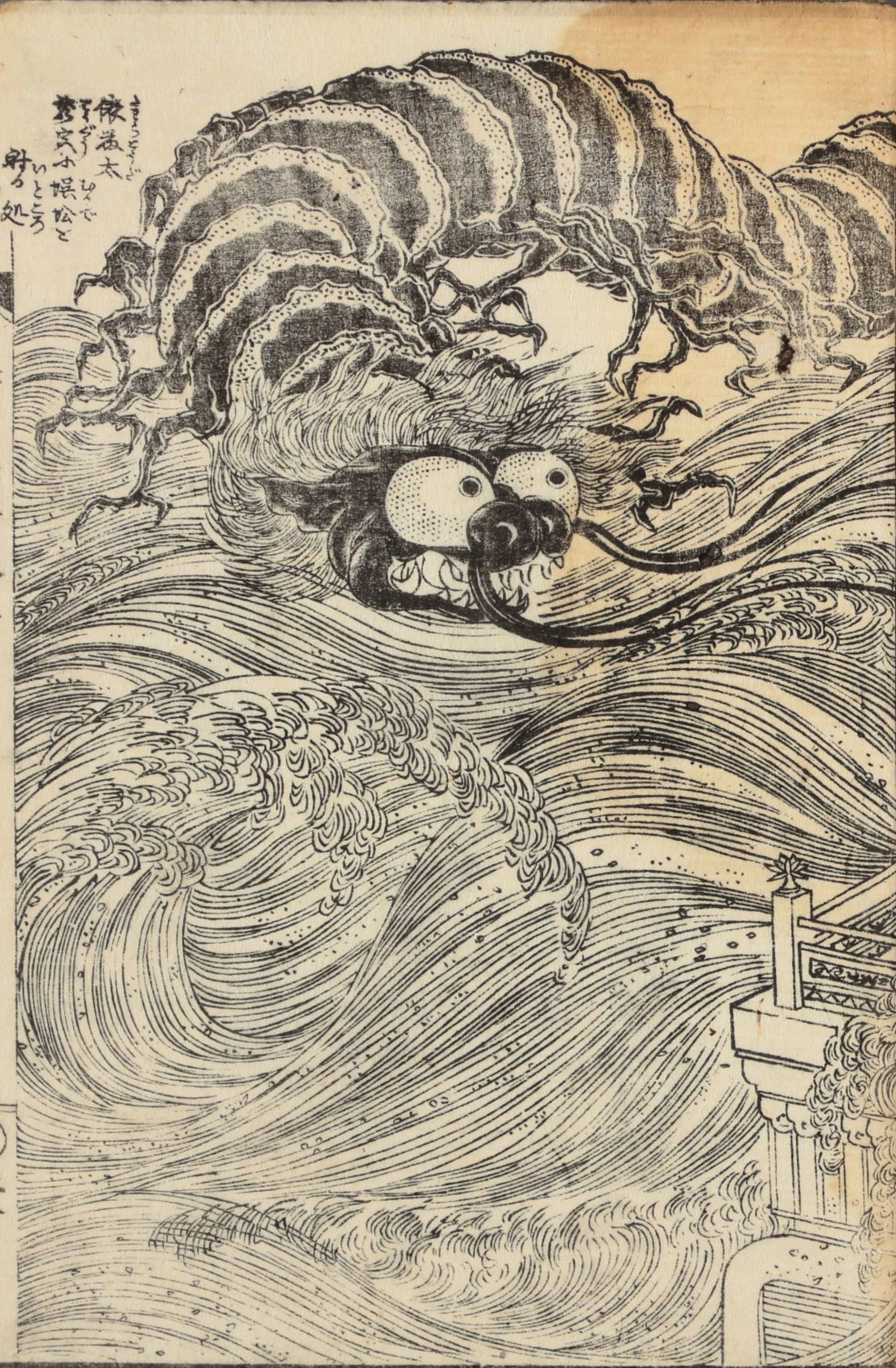
大蛇橋の上は横つりて卧し秀御らんを物ともぞん彼大蛇の背
 を踏て徐中く踰ゆれば大蛇忽地小男とありて秀御のまゝ小ま
 さくのめき。某年来貴賤往來の人を試るよ。此辺が如死剛あるの
 あ。いん小後來地を争ふ大敵ありそれを討つてなびてんやとぞ。
 秀御一談やも及びと仔細いりど領議士の男を先小立す。湖水乃
 浪をこえ水の中へ入ると五十餘所ゆて一の樓門あり開れり内へ入るよ。
 溜騰の波金玉の鬘奇麗莊観言葉あゝ盡されど朱門高閣帝
 王の百石城小まうたも。ゆて男まづ内へ入る衣冠を脱ぎ秀御を
 客位よ請ぐるよ。右侍衛の官あゆ袖を列せられを歎待めど
 小酒宴既よ開ゆて夜ゆく深よれば寝皆くや敵の寄未るん
 たりかありぬとぞ周章と秀御ハ一生涯身を放さるりてとぞある。

俗間往住
 百足と馬
 蚊を蜈蚣
 と久謀ま
 姑、原本
 のま、一
 勝、一

五人張小せん残りくく雷湿し二年竹の節近あるを十五束之伏よ拵
 と撥の中根を善本まきぐら徹しなる矢只之條を拵扱く。今つく
 と約程よ比良の高峯のくくよを焼松二二千ちるを二行小燃く中
 鳴の如くあるりののの龍宮城をさうと近づたまる物のお体を熟視
 小二行は燃てる焼松は彼が左右のまよとありたりと見えたりあられ
 百足の馬蚊の化なるうとさろゆて夫はちうううられば弓矢うち刺さ
 奇ちなり眉間の真中を射しうらうらその矢よごいあれども鐵を射
 るとぞほえそ。善をくくまきぐら秀御一の夫を射損とて女ゆぐ
 めひらぶ。二の夫を刺す。あやト矢所を射しうらうら。これも又身よ
 むとさろの夫今いよ一橋よありぬらふ小せんとおひらるが倍と業ト出
 たるありてこの度射んとさる夫頭小唾を吐きそ。あやト矢所を射

正史遺書

依後太
意文小
好の
処



寶庫卷二

廿

